
第13回公開研究会

テーマ 福祉が拓く不登校児童・生徒の早期キャリア教育
— 介拓プログラム —

発表者 戸枝 陽基 NPO 法人ふわり理事長・社会福祉法人むそう理事長

発表概要

今日は不登校対策ということですが、どちらかという通信教育に通っている高校生などに、福祉事業所に関わって働いてもらい、そのお金をきちんと貯めて、将来的に高校卒業後の進学の際の奨学金（奨学金は基本的に借金なので）でその負担がないようにしたいという願いがあります。

介護の介に拓く、未来を拓くという意味で介拓奨学生プログラム（介拓奨学生プログラムの詳細は後述）を始めました。福祉事業所に関わってもらうなかで、介護士等と会って関係性をもち、介護士等が伴走支援をしています。

●生きづらかった子ども時代

私が介拓プロジェクトをやろうと思ったのは、自分の育ちにその背景があります。

母は目が片方弱視の一種一級の障がい者です。舌癌で舌を半分取って、流動食を流し込むため、歯を全部抜きました。母は癌が治ったタイミングで父と出会い結婚して、7人の子どもをもうけました。僕が小学校5年生の時に、母が喉頭癌を再発したのです。喉に穴を開けて呼吸をする手術を受けました。その後も癌で入院を繰り返していました。

当時、私たちは群馬に住んでいて、東京の国立がんセンターに母は入院し、父は、平日働いて、土日に東京の病院まで車で通い母の看病をするという生活をしていました。そして、私が中学校に入ったタイミングで父は結核になりました。東京の清瀬の結核の療養所に入りました。そして、生活保護世帯になりました。高校と大学は、アルバイトと奨学金で、大学まで何とか進むことができました。しかし、高校に行っても何か意味があるのかなと思ひ、2割くらいしか行きませんでした。人生は、先の見通しがないと気持ちも荒んできません。自分は生活保護世帯なのだから、税金のお世話になって生きているのだと、福祉の中に生きると自尊心やプライドが傷つくという体験をしました。

●障がい福祉なら全部入り（児童から高齢者までライフステージ全般関われる）

中学校の頃に母は目が見えなかったので車に乗れず、父は結核で療養所に入ってしまった。そこで、私が月に一回の役所の生活保護費の配られる日に、戸枝家を代表して生活保護費を取りに行きました。当時の役所の職員は月～金の9時～5時しか働かず窓口が開かないので私が平日の昼間に制服で生活保護費を取りに行きました。窓口の人が「君、学校はどうしたのだ」と怒る。「うちの家族が暮らせないから取りに来たんですよ。」と言うと、ああそうかって。お前のお母さんは本当に働けないのかとか聞かれたりして、役所の窓口で揉めました。デリカシーのなさに対して憤りを感じながら、でもお金を貰わないと家族みんなが暮らせないので、お金を受け取って帰ってくる。そんなこと体験していました。

当初、私が進学した日本福祉大学は、何で福祉の仕組みがあるのに自分は助けてもらえないのだろうという気持ちで行きました。そして、大学生の社会福祉の実習で、自分が生活保護をもらっていた自治体の実習に行きました。その実習でお世話になった役所の窓口で、戸枝君は福祉課に来て何がしたいか聞かれたので、できれば自分は生活保護費を配らせてくれないかとお願いしたのです。

印象に残っているのは、真っ赤なスーツを着た女の人の方が来たのですが、顔色は悪いけど何か元気なのです。誰かの代理でなくご本人の生活保護でした。「元気ですよ、あの人は何で生活保護を貰っているのですか」と担当の人に聞いたら、やくざのヒモということ。三十年以上前の世界ですけど、生活保護は切らないといけませんが揉めるから、まだ出していると言われました。私が中学生の時に窓口で福祉課の人にひどいことを言われてずっと恨んでいました。しかし、モラルハザードというか福祉のチェックなどが厳しくなるのは、悪いやつがいてルールを守らないからであって、やはり正しく使われるということをチェックしようとすると言いたくないとも言わないといけない。そんなからくりが、学生時代に実習など学ぶ中ですごく整理されていって、福祉の仕事って本当に一筋縄ではいかない複雑な世界だなというのが大学で福祉を確認するという結論でした。

私は1991年のバブルの最後の時期に大学を出ました。福祉大を出ても多くの友達が企業を選ぶ時代でした。

私は、日本育英基金の借金としての奨学金があり、学校教員になると育英基金を返さなくていいわけです。高校、大学と借りていたので、育英基金だけで250万円くらい借金がありました。250万円が免除になると思って、中高の社会科という教員免許を取り、実際に地元の群馬で保育士の養成学校というか専門学校の教員の内定をいただきました。

教育実習に行って、やはり体育館裏に居て授業に参加しない子達ばかりが気になるのですよ。どうして授業に参加しないのか、どうして荒れているのかと一人ひとり聞いていきました。小学校の分数計算くらいで躓いて、それ以来授業に出るのが苦痛だけど、誰も教えてくれないとか、もちろん塾に行くお金がないとかそういったことを気持ちを開くと話してくれました。

実習生ながら校長先生に、「あの子たちにきちんと教育しない教育とは何か」と食って掛かると、先生に「うるさい」と言われて。そんなところをきちんと救っていくのは、それこそ福祉の領域で、学校ではなかなか追いつかない。校長先生に、戸枝くんは体育館裏の子ども達が気になるのなら教員は向いていない、ある程度の割り切りがないと難しいとはっきり言われました。そうだとすると、なるほど福祉なのかなと思って教員はやめました。

福祉をやるなら、赤ちゃんからお年寄りまで、一番シビアなニーズにきちんと向き合いたいという気持ちがあって、障がい福祉は、ライフステージ全般にきちんと関われるということと、もちろん難しい多様なニーズがあるという世界なので、障がい福祉がいいなと思い事業所を探しました。

●暮らしの4本柱：育む・経験する・働く・住む

育む：「児童発達支援事業 ほわわ」

経験する：外出支援 社会参加・様々な体験

働く：生活介護でも働く 自然養鶏

住む：共同生活住居・グループホーム 夕食

「社会福祉法人むそう」は、育む・経験する・働く・住むという軸で、まさにその、ゆりかごから墓場までというイギリスの福祉を表現する言葉ですが、障がいのある人が施設に閉じ込められるのではなく地域で暮らせるようなトータルサービスを提供したいというのが、私の志で、社会福祉法人むそうの活動です。

今は医療的ケアの支援を私自身も社会福祉法人むそうもこの十数年、かなり重点的にアプローチしてきました。名古屋の「施設ほわわ」は、二階が医療的ケア児のデイサービスで、一階カフェがあるチョコレート屋です。この施設は元々医療的ケア児だった大人の障がいのある人の働く場としてやっていて、そこに二階の医療的ケア児の子どもを預けた親が下りてきて働ける。医療的ケア児の家族の就労の場所みたいなものを作って提供します。元医療的ケア児も元気に働いている様子を一緒に関係を作りながら見て、お母さんの子どもも、頑張れば医療的ケアが取れるかもしれないということを知っていただき、見通しをもてることが元気になるには大事なことです。

中には医療的ケアが必要で知的障がいのないタイプの子どもたちがいます。そういう子たちに看護師を小・中学校に配置していく方がいいということを実践として明らかにしてきましたし、それを政治や場合によっては霞が関に伝える中で制度を作るといふこともしてきました。成果としては、医療的ケア児支援法という法律ができて、医療的ケア児が地域の中で暮らしていくというときに、自治体や保育園や学校に、きちんと体制を整える責任があるのだということなどを法文化してきました。

●医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律の全体像（令和3年6月11日成立）

医療的ケア児とは、日常生活及び社会生活を営むために恒常的に医療的ケア（人工呼吸器による呼吸管理、喀痰吸引その他の医療行為）を受けることが不可欠である児童（18歳以上の高校生等を含む）

立法の目的

- 医療技術の進歩に伴い医療的ケア児が増加
- 医療的ケア児の心身の状況等に応じた適切な支援を受けられるようにすることが重要な課題となっている
- ⇒医療的ケア児の健やかな成長を図るとともに、その家族の離職の防止に資する
- ⇒安心して子どもを生み、育てることができる社会の実現に寄与する

基本理念

- 1 医療的ケア児の日常生活・社会生活を社会全体で支援
- 2 個々の医療的ケア児の状況に応じ、切れ目なく行われる支援
 - 医療的ケア児が医療的ケア児でない児童等とともに教育を受けられるように最大限に配慮しつつ適切に行われる教育に係る支援等
- 3 医療的ケア児でなくなった後にも配慮した支援
- 4 医療的ケア児と保護者の意思を最大限に尊重した施策
- 5 居住地域にかかわらず等しく適切な支援を受けられる施策

支援措置

- ・国・地方公共団体による措置～国・地方公共団体の責務
- 医療的ケア児が在籍する保育所、学校等に対する支援
- 医療的ケア児及び家族の日常生活における支援
- 相談体制の整備
- 情報の共有の促進
- 広報啓発
- 支援を行う人材の確保
- 研究開発等の促進
- ・保育所の設置者、学校の設置者等による措置～保育所の設置者、学校の設置者等の責務

- 保育所における医療的ケアその他の支援
 - ➡看護師等又は喀痰吸引等が可能な保育士の配置
 - 学校における医療的ケアその他の支援
 - ➡看護師等の配置
 - ・医療的ケア児支援センター（都道府県が社会福祉法人等を指定又は自ら行う）
 - 医療的ケア児及びその家族の相談に応じ、又は情報の提供若しくは助言その他の支援を行う
 - 医療、保健、福祉、教育、労働等に関する業務を行う関係機関等への情報の提供及び研修を行う 等
- 施行期日：交付日から起算して3月を経過した日
- 検討条項：法施行後3年をめぐりしてこの法律の実施状況等を勘案した検討
- 医療的ケア児の実態把握のための具体的な方策
 - 災害時における医療的ケア児に対する支援の在り方についての検討

介拓プロジェクトをやり始めた動機の話をさせていただきます。

読売新聞の記事（2022/3/21）で、人材紹介業者に関わる過去の新聞記事を紹介します。例えばAがむそを離職して次の職場に移るとなった時に、この紹介業者に登録をする。例えば紹介業者を介してむそに就職すると、むそさんは紹介してくださってありがとうと会社に10万円払うとする。すると会社は5万円を自分たちの売り上げとして取って、5万円はこの紹介されたAに配るという仕組みになっているのです。人材紹介業者を使えば使うほど首が締まっていて、介護事業所は倒れていってしまうのです。

●若者の介護の職業イメージ

- ・親が介護の仕事に魅力を感じているか→No 52%
- ・両親は介護の仕事を勧めるか→No 69%
- ・就職先として魅力があるか→No 68%
- ・介護の仕事に就きたいか→No 77%
- ・人が足りない (95%) 難しい仕事 (91%) 地味 (87%) 資格が必要 (86%) 重い仕事 (85%) 報われない (83%) 厳しい (81%) 汚い (63%) 暗い (54%)

介護神奈川県社会福祉協議会（2011）「平成21年度介護業界及び介護職に対する若者のイメージ調査報告書」(介護と介護就労へのイメージ)

これらが現在の介護の職業イメージです。私が1991年に就職した時から3Kと呼ばれる“きつい汚い給料が安い”というイメージが、介護の仕事に浸透したということだと思います。

私はいろいろなところで福祉の仕事はおもしろい、楽しいとずっと言ってまわっていますし、社会福祉法人の理事長は一千万円以上貰っています。価値のある仕事で、周りの社会的な評価が具体的に高まった時に、その専門職集団は価値があるものとしてきちんと給料も含めて評価されるのです。

●介拓奨学生プログラムについて

自分の力と未来を拓く 介拓奨学生プログラム 高校生募集開始！

- こんなあなたへ 進学・就職のための費用を貯めたい
- 将来のことがイメージできない
- 未来につながるスキルを身に着けたい
- ワクワクすることを始めたい
- 高め合える友達を作りたい

高校生から実務経験を積み、早期キャリア形成へ繋がります！

介拓奨学生プログラム説明会



高校生のための初任者研修（研修費・交通費無料）：時給アップ、スキルアップ



介拓奨学生として介護施設で働きつつ・実務経験・賃金・奨学金 を得ながら高校生活



- ・介護福祉士（国家資格）取得への実務経験
：経験が重要になってくる現場で、一步先にキャリアを積みめます！
- ・就職・進学 自ら掴む進路選択

愛知県の「一般社団法人アスバシ」さんは高校生の早期キャリア形成だとか高校生のインターンシップの様なことをしている市民団体です。アスバシさんは、私学が多い愛知県の高校生に、六万部くらいかなり密度の高い意味のある広報誌を配るといふ活動も十数年やっていて、その流れの中で私は上記のビラを愛知県中の高校生に配りました。

高校生にヘルパー講座をします。ヘルパーというのは介護職員の初任者研修という名前なのですが、3週間くらい勉強して働いてもらいます。働いたら賃金は参加事業所、福祉事業所に、しっかり大学生や一般社会人と違いのない時給を保証してきちんと給料を払っています。本人の合意の上で、本人の名義の通帳に賃金はずっと積み上げさせていただいて、大学とか専門学校などの進学が見えたタイミングで、そのお金を戻すという形です。ただのアルバイトではなく、学校と協力しながらどうやって担保するかということも、それぞれで対応させていただいています。

更に介護福祉士へ国家資格と書いてありますが、実務経験を積み上げると、いろいろな福祉の資格が取れるようになるのです。例えば3年働くと介護福祉士という国家資格の受験資格が出てきますし、5年働くと施設長資格が取れます。実は介護の世界は多様な人材の参加ということを大事にしたので、実務の経験で、働いた期間のカウントでキャリアアップができるという資格体系になっているのです。こんな形でキャリア形成をしたらどうかということ、説明会でこういったビラを作りながら説明します。併せて、介護事業所で自分がやれるかなという不安感を持つ人たちがたくさんいるので、「マイチャレンジインターンシップ」という形で、まず1日からインターンに行ってみようという場も、ちゃんと提供しています。

引きこもっていた男の子が、お母さんからの相談でこの事業所の人が介入した時に、カブトムシの育成のボトルで家の中がいっぱいになっているという相談をお母さんより受けました。事業所の代表の濱野さんとは昆虫を一生懸命育てている彼のために、昆虫を売るショップというものを立ち上げました。引きこもってカブトムシを飼っていた彼は、僕はこれだけで生きていくと決めていたのに、お母さんは僕のことを引きこもりと呼んでいたのだと。しかし、儲かっているものですから、ヘラクレスオオカブト虫を売って、「僕はプロになりました」と言っていました。大事なことは濱野さんと日本福祉協議機構が介入して、ヘラクレスオオカブト虫の繁殖ができるという能力を社会化したことです。まさにニーズをとらえて、その人が生きていく社会的な居場所や装置も作ってしまうというような、そういうことも体験いただいています。福祉って誰かを幸せにする営みでそれで飯が食えるのです。こんなに楽しい仕事はないです。

ヘルパー講座を作るときに、子どもたちのことを知ってもらいながら、受け入れ先事業所の職員を育てるといふような視点をもって講師を出していただいています。講師の方達にオーダーしたのは、なるべく座学をできる限りやめ、体験的に学べるようお願いしました。例えばテキストで2時間という枠を30分間説明、90分は体験的に体を動かしたりワークショップをしたりという形で実施しています。

修了証は、ヘルパー講座を中心になってやってくれているサポートちたの担当に、とても立派な修了証を作成しました。修了証を渡した瞬間に子どもたちの中で大きな変化が一つ起こるのです。本当にしみじみとこれを眺めながら、「俺、賞状なんて貰える人間になるなんて思わなかった」と言っていました。3週間という適度なプログラムで、ある意味このヘルパーの資格は国の価値ある認証資格で、一生涯どこに行ってもヘルパーの仕事ができるという証書です。何かを頑張り切ったという、それを目に見える形で認めるというのが、一つ介拓プログラムの大事な部分だと思っています。

夏休みに取って設定したのは普通の全日制の高校の子たちが来ると思ったからで、結局ほぼほぼ全員通信の子でした。そのわけは、二つの理由があると思っています。

一つは月曜日から金曜日まで学校に行っていないので、介護事業所で働けるのですね。もう一つは彼ら自身が福祉的な背景を持っている子が多く、どういう背景かという、引きこもりで中学校にほとんど行っていませんとか。発達障がいのかかなりシビアな子たちがいましたが、お母さん達が自分の子どもの特性には気付いていて、福祉の人たちの居場所作りだったら受け止めてくれるのではないかと思い連れて来たのですね。

あとは、ヤングケアラーです。プロから介護が学べる中で自分の環境が前向きに変わるのではないかと、そういうニーズで来ている子ども達がすごく多かったと思っています。

●あたらしい若者支援 (5/11のCBCテレビの内容から)

介護で未来拓く「介拓」で人生が変わる

「暇だしやってみるか！」と始めたら介護のイメージが変わった！資格を取りながら将来を拓く「介拓プログラム」は一石三鳥!?

テレビ局アナウンサー：

困難を抱えた高校生が介護のアルバイトをすることで未来を切り拓く、「介拓プログラム」取材しました。週4日二つの介護施設を掛け持ちで働いています。服部寛己さん16歳。

これが本業ではなく今高校2年生です。全く縁のなかった介護の世界に関わるきっかけは、去年始まったある奨学制度でした。その名も介護で未来を切り拓く介拓プログラム。

不登校や貧困など様々な事情で将来が見通せなくなった若者に、介護現場で働いてお金をためてもらおうと、NPOや社会福祉法人が始めました。

介拓プロジェクト実行委員会 毛受芳高事務局長：

資格を取りながら自分の将来が拓けたらそんなにいいことはないのではないかと考えています。介護事業所の人手不足もありますし、若者たちの進路選択、それから奨学金の問題などを同時に解決できるのではないかと考えています。

アナウンサー：

この奨学制度では一番初級の資格、「介護職員初任者研修」を取るための受講料およそ10万円や交通費などをすべて支給。働く先も紹介します。介拓プログラムによって資格を取り、この施設で半年以上働いている服部さん。利用者の方とも、すっかり打ち解けています。

服部さんは、中学3年生で人間関係に悩んで不登校になり、その後高校に入りましたが、ここにも合わずに1か月で退学、今の通信制高校へ。そんな時出会ったのが、介拓プログラムでした。

服部さん：

夏休みの期間に学校のホームページで「介拓奨学生プログラム」という研修を見つけて、「暇だしやってみるか！」という気軽に行ったら、すごく介護のイメージが変わりました。

利用者さんの成長・変化を間近で見ることができるなど、大変なこと以上にやりがいを感じられる仕事だと思いました。もっとたくさん経験を積んで、自分のやりたいことにつながる資格を取っていけるように頑張りたいです。

アナウンサー：

この制度を利用した一期生は17人。その中には目標を見つけ、前に進む人も。愛知県東海市に住む岡谷若葉さん、18歳。彼女も開拓プログラムの一期生で、ためたお金を学費にして、4月から写真の専門学校に通っています。

(以下、アナウンサー、岡谷若葉さんとのやり取り)

アナウンサー：

岡谷さんが写真で生きていく、そう決めたきっかけは夜桜の一枚の写真。自分の将来が色鮮やかに見えたといいます。

岡谷さん：

何回もここに来たのですよ、上手にとれなくて。「どうやって撮るのですか」とか聞いたりして設定を変えてみたら、きれいに撮れた時とかにとっても楽しいなと思って、もっと写真を学びたいと思って。一番楽しいです。何しているよりも写真撮っている時が一番楽しい。

アナウンサー：

小学生の時に親が離婚。中学3年間はほとんど学校へ行かず、高校も通信制でした。人との関りが苦手だった岡谷さんにとって、介拓プログラムは自分を変えるきっかけに。カメラマンを目指しつつ今も週1回、介護施設でのアルバイトを続けています。

岡谷さん：

金銭面も負担してくれるし交通費も出してくれて、友達もできたというので、すごくよかったなと思います。資格も取れたしその後もバイトさせてもらっているのも、ありがたいなと思っています。人と関わるのが苦手だったりしたんですけど、今もめっちゃめっちゃ明るいわけではないけど、前より明るくなったねと言われるくらいにはなった。それは介拓を経験して、友達ができたりとかしたので、介拓のおかげだと思います。

アナウンサー：

- ・この介拓プログラムというのは、ただお金で支援するのではなくて資格を取って働く喜びを知ってもらって、それで未来につながっていくというのが従来の支援と少し違う形だと思います。
- ・服部さんも岡谷さんも人と関わるのが苦手だったということで、そこに壁があったようですが、介護を通してその壁を打ち破ることができてよかったです。その介護業界では2年後、東海三県で2万人以上の人材不足になると言われています。彼らが新たに関わることで、介護の世界に興味を持って新たな担い手になる人が出てくる、そんな可能性も秘めているかと思います。

戸枝さんの補足：

むそうではカフェの方の店員さんをやって、そこで障がいのある人と出会って、少しずつケアのことも入っていきます。まだ高校生ですから、いっぺんにケアというよりは、まずは毎日通ってくるところからアプローチをするようにしました。岡谷さんはすごくいい写真を撮るので、「活動日に利用者さんのことやむそうの活動の写真をカメラでどんどん撮ってくれ」と言いました。岡谷さんが来た時に彼女は3年生でした。夏休みにヘルパー資格を取りました、9月の頭からむそうを希望して来てくれていました。彼女はカメラの専門学校はいくら入学金が必要で、いくらくらい学費が必要か知りませんでした。カメラの専門学校に行きたいという思いまでしかなくて、お金の組み立てなどは、彼女の発想としてなかったと思います。自分の将来の希望に向かった、例えば資金計画のようなものを一緒に考えていかないと、入学に至らない訳です。伴走支援的な教育を具体的に考えない高校を卒業しても職業的な自立ができない。こういうことが大量にもうすでに起こっているのではないのでしょうか。

●アプレントゥィスシップ～ apprentice ship ～

- ・「アプレントゥィス」とは「徒弟」や「見習い」のこと。職人の世界では古くから存在していた徒弟制が、英国で1964年に議会によって制度化され、「アプレントゥィスシップ制度」として現在でも運用されています。
- ・「福祉の仕事」は、手業の部分が大切なのではないかと。すると「丁稚（でっち）」の復活が王道なのではないかと考えています。

『丁稚のすすめ 夢を実現できる、日本伝統の働き方』秋山利輝 家具職人・秋山木工代表

秋山木工の代表の秋山さんは、中学を出たくらいの子どもたちを預かって3年くらい寮生活で、秋山さん夫婦と一緒に住み込んで、3年で一定レベルの家具職人に育てるということを丁寧にやっています。学校教育の矛盾や、30人とか40人の集団についていけないと、それは協調性がないというように裁かれてしまうけれど、実は尖った個性があるので集団が苦手という子たちもたくさんいて、その子たちがマッチングを間違えなければ、すごく力を出す天才かもしれないですね。そういったフィールドとしての、私は介護の仕事をしているから介護を提供するような日本版アプレントゥィスシップ、ある意味では丁稚奉公みたいなそんな形で、ヘルパー資格は15歳から取れるものですから、15歳からの子どもにアプローチする。それを具体的な形にしたというようにご理解いただければと思います。

●働きながらキャリア形成できる！

資格所得も基本的に6年計画

- ・第一段階：介護職員初任者研修（ヘルパー資格）取得！
医療的ケア研修（3号研修）
- ・第二段階：実務経験：1年 行動援護従事者
重度訪問介護従事者
：保育士資格（9科目の認定試験）
- ・第三段階：実務経験：3年 介護福祉士
訪問系サービス提供責任者
：准看護師（夜間3年間or昼間州3日×2年）
- ・第四段階：実務経験：5年 サービス管理責任者
相談支援専門員（障がい福祉）
介護支援専門員（介護保険）
：看護師（実務経験7年）リハ職

これはキャリアアップのラダー（梯子）のイメージです。介護職員の初任者研修というのが、ヘルパー資格です。むすの医療的ケア児の事業所で働くとなったら、医療的ケアができるヘルパー資格があります。看護師から研修を受けて、資格を取れるというものです。1年たつともっと難しい対象者へのヘルパー資格が取れます。保育士の資格は9科目の認定試験に合格すると取得できます。介護の施設長資格のことをサービス管理責任者といいます。また、障がいの事業所で働いてケアマネージャーの資格もこの実務5年で取れます。あとは、医療的ケア児に一生懸命、愛情を持った子たちの中には、准看護師の学校に行きたいという方がいます。夜間だと3年、昼間だと週3日×2年間で取れます。シフトを加減すれば、働きながら准看護師の学校に通うというのは可能です。准看護師を取ってから実務経験7年で、通信等で正看という普通の看護師の資格が取れます。こんなキャリア形成のスタートラインを15歳の中卒に設定する。その上で丁寧に伴走していくと。こういうトライを始めたところとご理解いただけたらと思います。

●医療・介護・保育・教育などのキャリア形成をワンウェイに出来ないのは、ただただ、縦割り行政の効率の悪さだけなのではないだろうか？…

引用：堀田聡子 季刊・社会保障研究 vol.47 オランダでの経験から

オランダの看護・介護職の資格構成とヘルスケア専門職法

出所：Ministrie van VWS and OCV(1996)をもとに、その後の変更を踏まえ一部著者改変

オランダでのキャリアラダー（要するに介護系の仕事と看護師という医療系の仕事、これが実務経験でヘルパーを始めた人が努力すると看護師になれるというルート）は、一本道です。介護系から入って、より難しい人を見ながらまさに医療的ケアをする。医療行為に踏み込んでいながら、最終的には看護師になれるのです。

●看護・介護職の資格モジュール（レベル1～3を抜粋）

出所：Ministrie van VWS and OCV(1996)、Calibris (2007)

（表は省略）

オランダでは、ケアヘルパーから始まって最終的には看護師になることができます。介護職の給料の方が安い人はいても、看護師さんで給料が安いという人はいないので、きちんと努力すれば低賃金から抜け出せるわけです。日本の場合は別々の資格になっている。なぜかと言えば縦割り行政の弊害だと思います。このキャリアをできれば一本道にして、自己実現ができれば給料がもらえる形になったらいいなと思います。伴走支援すれば、オランダのような介護職から始まって、ちゃんとした給料がもらえる医療者にまでレベルアップするか、場合によっては資格を伸ばしていくというのは可能なので、これを具体的にチャレンジ。資格が取れていく、場合によっては自分の実力が伸びていく、そういった実感の中で子どもたちが自信をつけて、自分の専門性の中で社会人として、自信を持って社会貢献していく様な学びの場になってきています。そういうことを思考錯誤しているということです。

●新たな財源：③つの資金がある！

△個人：流動資産 寄付、遺贈

不動産資産 寄付、遺贈

リバースもゲージ

リースパック

▼税金：制度による税の還元

各種補助金

各種助成金

△企業：CRSによる後見的关系から利益を生む協働へ

ヤングケアラー対策の一つとして面白いのではないかと、興味を持ってきている人もいます。日本は人口自体が減る国なので、なかなかこの仕組みにお金が付くのは難しいかなと思っています。企業は世界的に展開して、例えば愛知県はトヨタ自動車さんとその関連企業がたくさんあります。自分たちの従業員の、場合によっては介護離職を防ぐために、この介拓プログラムに興味を持つ。またはCSR（企業の社会的支援）的にお金を使うということは、十分にあり得ると思っています。

●市民の財産循環で「新しい公共」を生む

（図は省略）

あいちコミュニティ財団という公益財団法人の経営を始めたのは、そういった企業とか個人の資産を、市民活動とか福祉の活動とか場合によっては子どもたちの環境作りに使うということが、税金などで回す福祉を考えるよりお金も動きやすいので、具体的なアクションとしてスピード感を持ってできるのではないかと考えています。

●事業の仕組み（あいちコミュニティ財団）

・参加者と役割

高校生：初任者研修終了後、認定就業先にて奨学生として勤務する。

高校：介護職に興味を持ち奨学金を希望する学生への情報提供。

福祉事業所：人材育成費用の負担。修了後の学生の採用。学生の伴走支援。教育プログラムへの協力

選考委員会（外部）：エントリー高校生の選考。就業先の認定。就業プログラムの作成運営支援。あいちコ

ミュニティ財団：資金需要の支援。外部寄付の獲得。

事務局：本プログラム全体の運営

・事業所の参加団体の要件

非営利組織評価センターの認証？

事業所の“おもしろさ” + “事業所の中に伴走できる人”

・財源：遺贈寄付、介護の未来を拓く若者基金

（図は省略）

高校生の介拓奨学生プログラムも、今は介護事業所がお金を、200万円出していますし、冒頭に記した人材紹介事業所に払うお金を考えれば、介拓奨学生プログラムに使うお金の方が前向きだと考えています。事業所によって金額は違いますが、全部で5社が高校生の交通費、ヘルパー講座代などを出させていただいています。服部くんのような優秀な学生にはさらに奨学金を出します。その原資を徐々に、遺贈寄付や、介護の未来を拓く若者基金という名前にしていますが個人の寄付等で回していくという事業フレームでやっていきたいと思っています。これから、不登校児のこともですが新しいミッションは、国の仕組みや行政の税金ということではなく、個人資産や場合によっては寄付とか企業の社会貢献とか、そういった流れで組み立てていく方が、特に子どもの問題は寄付や企業参加が得やすいと思っています。ありがとうございました。